平成 29 年 11 月 8 日
T.Kobayashi

車窓を楽しむ鉄道の旅　その 4
～また出たユネスコ　上信電鉄の旅～

群馬県の高崎駅から、信越本線とほぼ平行して山一つ南側を西に向かって走る上信電鉄。終点は下仁田駅で、更に西へ富岡街道（国道 254 号線）を進めば、山を越えて信州に入る。
明治 28 年に上野（こうずけ）鉄道として開通し、下仁田まで通じたのは明治 30 年。当初は、余地峠を越えて佐久鉄道（現在のＪＲ小海線）の羽黒下まで延伸する計画で「上信電鉄」と社名を改称したが、世界恐慌により計画は頓挫してしまった。これが、上州だけしか走っていないのに「上信電鉄」と言われるゆえん。この不思議な路線名にひかれて、一度乗ってみたいと思うようになった。

この旅を企画した 1 月にはまだこんな情報は漏れてもいなかった・・・・・・。
10 月 31 日、「上野（こうずけ）三碑がユネスコの　”世界の記憶遺産”　に登録」と報じられた。何とこの旅の実行日を「明日」と確定して準備を整えた日のことだった。上信地方に富岡製糸工場に次ぐ観光の目玉ができたということだろうか。

平成 29 年 11 月 1 日
6 時半に起きた時には気温は 10℃、雲に覆われて秋らしい爽やかな陽光がなく寒々しい朝。
八千代台駅から、朝の通勤ラッシュのさなかモーニングライナーで快適に日暮里経由上野へ。
上野 9 時 28 分発高崎行、空いているし窓から光も入って来ないしで、やや寒めなスタート。新聞を読み、

ココアをすすり、車窓を眺め、居眠りを楽しみ、11 時 05 分**高崎**駅に到着。
上信電鉄は西口の最南端にあり、思いの外歩かされた。乗車券を買って、ついでに路線地図が入っているパンフレットを貰い、数枚の写真を撮って乗車。（左画像：高崎駅に入る折返し下仁田行）
11 時 23 分発下仁田行、新幹線と並走して南へ向かう。
住宅地の間を左右に揺れながら走るとすぐに、住宅地のど真ん中の**南高崎**駅に到着。烏川を挟んで対岸の台地の上まで住宅地が広がっているのが見える。新幹線と二度目の交差をした所にところに**佐野のわたし**という粋な名前の駅がある。その昔、烏川を渡る渡し舟があったところらしい。名前は古めかしいが、平成 26 年にできた駅らしい。目の前に横たわる烏川を渡ると、左にもうひとつ木造の橋が架かっているのが見えた。
鉄橋を渡ると、広がる田圃は稲刈りが進んでいる最中で、柿の木の鮮やかな色合いの向こうに黄金色の平面が褐色に変わっていく様は秋らしい味わいのある景色だ。
烏川と平行して南東に向かって走ると、**根小屋**（ねごや）駅に入る。左手車窓には烏川との間に広がる水田、右側には海抜 200mにも満たない丘陵地帯が広がり、その上に新しい町が連なっているのが見える。駅の南西の山中に入っていくと上野三碑のひとつ「金井沢碑（かないざわのひ）」がある。全国各地に点在する根小屋・根古屋などの地名は、城や館がある山の麓（根）の集落で豪族の家臣が住む館（小屋）が連なっていた所に付く名前らしい。この地の歴史が奥深いことを物語る地名のひとつに違いない。
僅かな距離を走ると**高崎商科大学前**駅、駅の東側の烏川との間に大学が建っているのが見えるが、川が氾濫したらひとたまりもないような場所なのが気にかかる。この大学の生徒だろう数人の若者が下車した。
やがて住宅地はやや疎らになり、畑の広がりの方が目を引くようになってきた。電車は徐々に右手の山裾に取り付いて走るようになり**山名**駅に入る。駅の西側の山中に上野三碑のひとつ「山ノ上碑（やまのうえのひ）」があるが、降りた客の中にはそこをめざしそうな客はいなかった。駅のすぐ隣に建つ山名八幡宮は威風堂々の佇まい。清和源氏新田義重の子である新田義範が、1170 年代に豊後の宇佐八幡宮の分霊を勧請して造営し、武神として祀ったといわれている。

電車は大きくカーブして南西を目指すようになり、烏川の支流の鏑川を遡るようになる。
稲刈りが進む田圃の景色は味があって良い物だ。鏑川に最も接近したところに**西山名**駅がある。後に山を背負い、前に鏑川流域の水田地帯が広がる温かそうな集落が続いている。
黄金色の田圃の中を切り開くように走り抜けると**馬庭**（まにわ）駅。南西方面に長く横たわる稜線は御荷鉾山方面かもしれない。戦国期に上杉方の総社衆に馬庭氏の名が残っており、この地に城を構えていた。後に武田信玄の西上州攻略の折武田方に鞍替えした人物で、地名の由来となっている。また、信州伊那出身の樋口高重が上杉方に仕えていたが、後にこの地に隠遁して武術（念流）を学び馬庭念流（樋口念流）を創始し、道場を作った。不思議な地名には面白い話がつきもので飽きることはない。
馬庭駅を出るとすぐに鏑川を渡り、西に向かうようになる。
吉井駅から北東へ 1.5Km ほどの所に上野三碑のひとつ「多胡碑（たごのひ）」があるが、車内のざわめきの中にもそのような単語は聞こえてこない。天正 18 年（1590 年）徳川家康からこの地を任された菅沼定利が

城を構えて飯吉（いいよし）と名付けたが、後に吉飯（よしいい）と改め、さらに吉井と変わったのが地名の由来。
北にも南にも遠くに連なる山並みがあり、見上げれば紺碧の空、近くは黄金の田圃と落ち着きのある景色。
（左写真：車窓に広がる大パノラマ）
鏑川に沿って僅かに西へ進むと**西吉井**駅、田畑をつぶして作った新しい町という風情の駅周辺。
線路はほぼまっすぐに西へ向かい続け、小さな川を二つほど渡って**上州新屋**（じょうしゅうにいや）駅へ。鏑川の南北を走る稜線の麓の取り付きは殆どがゴルフコースで、「上信ゴルフ銀座」という呼び名が相応しい。平安時代の延喜式に「この地に新屋ノ牧を開設した」という記述があるとのことなので、古くから存在する地名らしい。北側に大きな露岩が目立つ山が見えたので地図を覗いて見たら、山麓の集落に「造石」という地名があった。さらに、駅近くを流れている鏑川の支流である小さな川は三途川と言うらしい。
上州福島駅を出ると、少しばかり右に曲がって鏑川を渡り北岸に移動、川は川でやや南側に移動して距離を置くようになった。カインズホーム・K's デンキなどなど全国区の店ばかりが建ち並び、旅に出た実感が乏しくなってくるのは少々残念。視線を上に向けると、色の濃い青空に幾筋もの筋雲が走り晩秋の風情が漂う。
日本光電・ミツバ電機・沖電気などの大きな工場が並ぶのが**東富岡**。高田川と鏑川に挟まれた平野の中に町が広がっている。電車の進行方向に妙義山の特徴的な山容が窺える。
上州富岡駅に到着、さほど混雑してもいなかったが、殆どの乗客が下車してしまい、この車両に残ったのは私一人、もう一両の方にも一人か二人残っただけ。南遠方に東西に走る山並みは御荷鉾山の稜線かそれともその手前の山か？かの有名な富岡製糸場跡は駅から南西の方角、鏑川の北岸にある筈。駅に隣接した広い空き地が気になったが、どうやら観光客受け入れのために誂えた駐車場のようだった。
誰もいなくなった車両の中で、ややリラックスして腰の位置も変えてみた。一人しか乗せていないからでもなかろうが、やや軽めの響きを立てて、次の西富岡に向かって走り始めた。右前方に見えている妙義山の眺めを楽しむ内に**西富岡**に到着。誰も降りず誰も乗っても来なかった。
上州福島を出てしばらくした所から一直線に西に向かっていた線路が急に左にカーブして南西に向かい、妙義山を右手の車窓に移してくれたところで**上州七日市**（じょうしゅうなのかいち）。
加賀藩前田利家の五男利孝が大坂の陣で徳川方として参戦しし武運功績を挙げ、七日市の一万石の所領を得てこの地に七日市藩を立藩した。当時の藩庁が置かれた七日市陣屋の跡地には現在は富岡高校が建っている。七日市という地名は、一般的には「七日に市が立つ」ことによるとされているが、鏑川の流域には二日市という地名もあり次の駅にある一ノ宮も合わせて考えると、往時の賑わいが想像できる地名である。
逆光にきらきら輝く鏑川に再び接近するようになると**上州一ノ宮**。上州一ノ宮とは、駅の西側に建つ貫前（ぬきさき）神社のこと。創建は 531 年、祭神は経津主神（ふしぬしのかみ）と姫大神（ひめおおかみ）。物部姓磯部氏が興したと言われている。畑を転じて太陽光パネルを設置したところが多くなってきた。
川とともに南西に進路を取ってきた国道 254 号線と上信電鉄、電車はゆるやかに右にカーブして西南西に一

直線の線路になり、小さな川を渡り**神農原**（かのはら）駅に入った。駅の隣にネギ畑が広がっているのも下仁田らしくて良い感じがする。
江戸時代には神原（かのはら）村と言われていたが、近隣に類似した村名があることから神農原に改称したらしい。地図を開いてみると、駅の西側の街道沿いに「神成（かんなり）」という地名があり、どことなく神のにおいを感じる土地だ。
地図を眺めている内に、次の駅は「これぞ珍名駅」とも言うべき駅名であることがわかり、驚いた。上信越自動車道を潜ると、再び南西に進路を変えて**南蛇井**（なんじゃい）駅に入った。

大昔、アイヌ民族が居住していた頃に、「川の幅が広いところ（ナサイ）」という地名が誕生したという説があり、この地名は古墳時代以後に「那射（なさ）郷」となり、のちに南蛇井という漢字があてられたらしい。奈良時代には、南蛇井氏という豪族が存在していた事実もあるらしい。また、周辺の井戸から大きな蛇が出てきたことに由来するという単純な説もあるようだが、地図を見ると馬山・破風・蚊沼など興味をそそる地名が点在する。
南蛇井駅から次の**千平**（せんだいら）駅までは、北から妙義山の支稜線が長く伸びてきて、南からは御荷鉾山・赤久縄山の支稜線が迫ってくる鏑川上流の谷間であるにも関わらず、思いも寄らぬ広さの平地が広がっている。これが地名の由来とも関係あるのだろうか。おそらく鏑川の氾濫の歴史もあって、両岸は肥沃な土地なのだろう、田畑の広がりを見ているとそんな感じがしてくる。
千平を出ると、南北に垂れ下がるように伸びる浅間山の突端を川と一緒に巻くように蛇行して進み、再び視界が開けると終着駅**下仁田**に到着。時刻は 12 時 25 分、高崎から 1 時間 2 分の車窓の旅はこれにて終了。
蛇行する鏑川の関係で四方を山に囲まれているせいか、風もなく穏やかで温かそうな集落が広がっている。駅周辺の風景をカメラに収めた後昼食を食べる店探しの散策。下仁田は「カツ丼で町おこし」をしているとの情報を得ていたので、カツ丼が食べられる店を探すことにしたが、人があまり歩いていないし営業していないお店もあるしで苦労の末、駅前に陣取る食堂に飛び込むことにした。
「ご注文いただいてからカツを揚げますので、しばらくお待ちいただきます」と断り書きが書いてあった。「冷めてしまったカツを玉子でとじたカツ丼」が当たり前な首都圏から来ると、ありがたいひとことになる。直径 7～8cm ほどの丸いカツが三枚並んだカツ丼には、玉子はなく些少な野菜も乗っていない。ナゴヤの味噌カツ丼を思い出すようなシンプルなものだったが、柔らかい肉と絶妙な味のたれはなかなかの味だった。コンニャクの刺身が小鉢に入って横に並び、地元らしさを見せていたが、「カツ丼はどこにでもある食べ物なので、下仁田ならではの強い主張が必要」というのが率直な印象。余計なことを言わせてもらうならば、下仁田ネギのぶつ切りをカツ丼のたれで煮しめて三枚のカツの間に三本配したら「下仁田らしいカツ丼」のイメージが一層向上するのではないか。とは言うものの柔らかくて味のある肉、揚げたてのカツの味わい、相応しい舌触りのたれ・・・、カツ丼マニアとしては充分満足できるものだった。（900 円）

満腹の後は人通りのない静かな町をぶらついて、妙義山を眺めたりコンニャク工場を覗いて見たりの気ままな散策のあと地元のスーパーでネギとコンニャクを土産に買って駅に戻った。
帰路は下仁田発 14 時 40 分、往路で見落とした景色を眺めたり、往

路で気になった景色を再確認したりで退屈しない 1 時間余の旅だった。
高崎駅に着いたら、駅の乗換え通路に「上野三碑」の実物大のモニュメントが飾られていた。今朝通ったときには何もなかったので、「観光 PR のキックオフ」ということだろうか。

以上

＜Appendix＞　上野三碑について

高崎市の web より　https://www.city.takasaki.gunma.jp/info/sanpi/

我が国に 18 例しかない、古代の石碑の中で最古の石碑群。
上野国に住み着いた朝鮮半島からの渡来人がもたらしたもので、碑の内容は中国を起源として伝来した政治や文化、インドを起源とした仏教などが日本に到達し上野国に広まったことを証明するもの。

◆多胡碑

高さ 129cm・幅 68cm・奥行 62cm で、牛伏砂岩と言われる花崗岩質砂岩で、頭に笠石をのせている。碑文は 6 行・80 文字で内容は下記の通りで、
上野国 14 番目の郡として多胡郡が誕生したことについて述べられている。

弁官符上野國片岡郡緑野郡甘
良郡并三郡内三百戸郡成給羊
成多胡郡和銅四年三月九日甲寅
宣左中弁正五位下多治比真人
太政官二品穂積親王左太臣正二
位石上尊右太臣正二位藤原尊

要約　　註：（　）内は注釈。

朝廷の弁官局から命令があった。上野国片岡郡（ごおり）・緑野郡（みどのこおり）・甘良郡（からこおり）の三郡の内、三百戸を并（あわ）せて新たに郡を作り、羊（渡来人）に支配を任せる。
郡の名前は多胡郡（たごのこおり）とせよ。和銅 4 年（711 年）3 月 9 日甲寅。
左中弁正五位下多治比真人（たじひのまひと）による宣旨である。
太政官の二品穂積親王（にほんほづみのみこ）、左大臣二位石上（麻呂）尊（いそのかみのみこと）、右大臣正二位藤原（不比等）尊（みこと）

◆山上碑

高さ 111cm・幅 47cm・奥行 52cm で、安山岩の自然石が使われており飛鳥時代（681 年）に建てられた。自然石を加工せずに作られたもので、朝鮮半島の新羅の石碑に酷似している。完全な形で残っているものとしては日本最古の石碑と言われている。碑文は 4 行 53 文字。
放光寺という寺の長利という僧が母のために建てたものらしく、その系譜が含まれている。

辛己歳集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒売刀自比
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也　放光寺僧

要約

辛己年（681 年）十月三日に記す。佐野屯倉（さののみやけ）をお定めになった
健守命（たけもりのみこと）の子孫の黒売刀自（くろめとじ）。
これが新川臣（にっかわのおみ）の子の斯多々弥足尼（したたみのすくね）の子孫である
大児臣（おおごのおみ）に嫁いで生まれた子である（わたくし）長利僧が母（黒売刀自）の為に記し定めた文である。　　放光寺僧

◆金井沢碑

高さ 110cm。幅 70cm・奥行 65cm、輝石安山岩の自然石に 9 行 112 文字が刻まれている。
奈良時代の神亀 3 年、三家（みやけ）氏を名乗る豪族が先祖の供養と一族の繁栄を願って建てた石碑。

上野國羣羣馬郡下賛郷高田里
三家子？為七世父母現在父母
現在侍家刀自（他田）君目（頬）刀自又児（加）
那刀自孫物部君午足次＊刀自次（若）＊
刀自合六口又知識所結人三家毛人
次知万呂鍛師礒マ君身麻呂合三口
如是知識結而天地誓願仕奉
石文
神亀三年丙寅二月二十九日

要約　　註　＊＝馬偏に爪という字（ひづめの意）　　？＝不明

上野国群馬郡（くるまのこおり）下賛郷（しもさぬごう）高田の里の三家子？が発願して
七代の祖先及び父母のために、現在家刀自（いえとじ：主婦）の立場にある
他田君目頬刀自（おさだのきみめずらとじ）、その子である加那刀自（かなとじ）、孫である
物部君午足（もののべのきみうまたり）、次に＊刀自（ひづめとじ）、若＊刀自（わかひづめとじ）
の合わせて六人、また既に仏の教えで結ばれた人達である三家毛人（みやけのえみし）、知麻呂、
鍛師（かぬち）の礒辺君身麻呂（いそべのきみみまろ）の三人が、このように仏の教えによって
（我が家と一族の繁栄を願って）お祈り申し上げる石文である。

◇日本三古碑

群馬県の「多胡碑」のほかに、宮城県の「多賀城碑」と栃木県の「那須の国造碑」を合わせて
日本三古碑と言われている。
いずれも大陸から渡来した人が足取りを記したもので、これらの人々が我が国の成り立ちに大きく
関わってきたことを説明できる有意な史跡（資料）と言われている。
縁があって平成 26 年に「那須の国造碑」を鑑賞する機会を得た。その時にまとめた拙文（紀行文）
を関係資料としてご参照下さい。　http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/nasu.pdf